

大館遺跡群

平成2年度発掘調査概要



盛岡市教育委員会

例 言

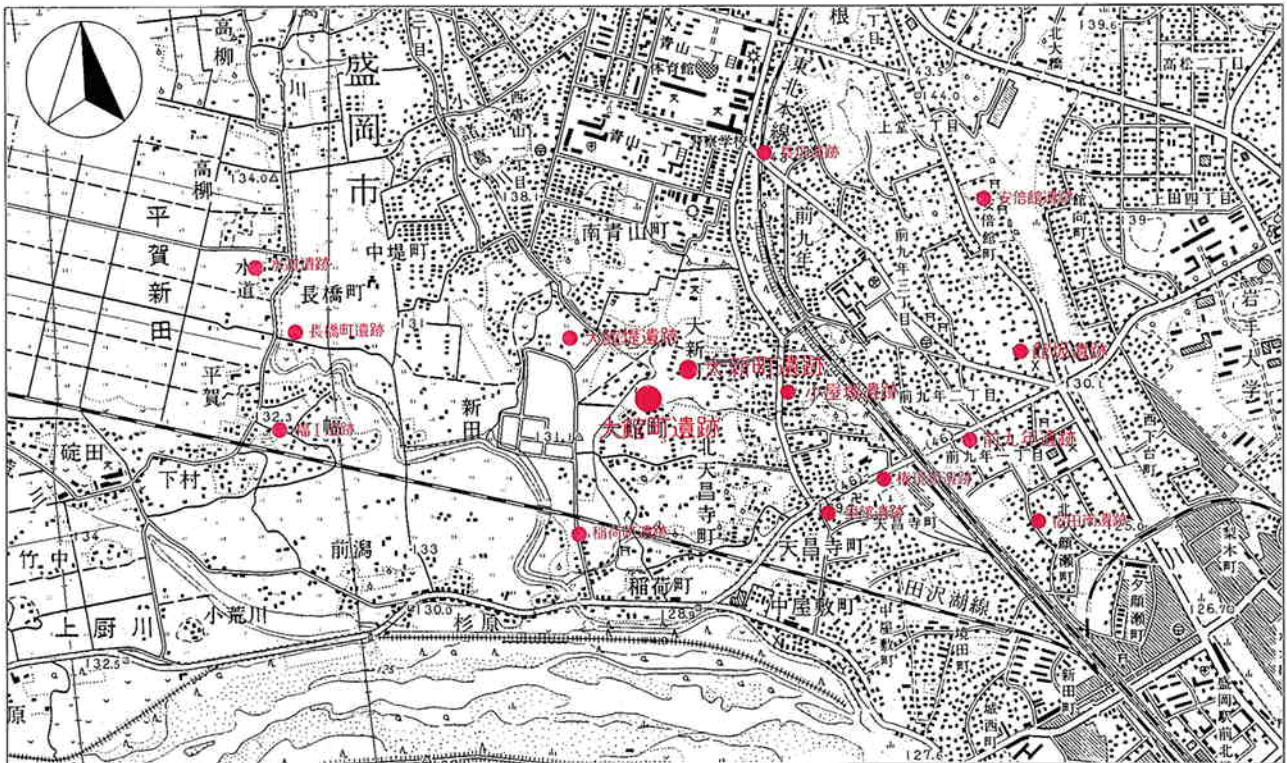
1. 本書は大館遺跡群・大館町遺跡の平成2年度発掘調査の概要である。
2. 本書は写真を多く掲載した概要書であり、調査の全体を示す事実報告については別途概報を作成する予定である。
3. 調査の主体者は盛岡市教育委員会で、調査の実施及び本書の作成は社会教育課文化係（八木光則・千田和文・室野秀文・似内啓邦・小原俊巳・内山陽子）がおこなった。
4. 調査の実施にあたって、次の方々から御指導・御協力をいただいた。記して謝意を表する（敬称略）。
岩手県教育委員会、岩手県立博物館、岩手県埋蔵文化財センター、菅原孝、藤原和夫
5. 大館遺跡群の遺構記号は次のとおりとした。

遺 構	記号	遺 構	記号
竪穴住居跡	RA	炉 跡	RF
建 物 跡	RB	溝 跡	RG
柱 列 跡	RC	配石・集石	RH
土 坑	RD	井 戸 跡	RI
竪 穴	RE	そ の 他	RZ

目 次

1. これまでの調査	3
2. 平成2年度の調査	6
3. 検出された遺構	8
4. 重複する住居群	9
5. 住居の構造	10
6. 住居の炉	11
7. 掘立柱建物跡	11
8. 中期の土器（ふたつの土器文化）	14
9. 土器の形と用途	14
10. いろいろなかたちや文様	15
11. 埋 甕	16
12. まとめ	18

・本遺跡関係文献で盛岡市教育委員会刊行のものは、『大館町遺跡—昭和51年度発掘調査報告』および『大館遺跡群（大新町遺跡・大館町遺跡）発掘調査概報』昭和55～平成元年度（10冊）の計11冊がある。



遺跡の位置（1：50000）



大館遺跡群航空写真（1：8000）

1. これまでの調査

大館遺跡群は盛岡市の北西部、雫石川北岸の丘陵性台地(火山灰砂台地)の縁辺部に位置している縄文時代中期を主体とする6遺跡を包括したものです。

遺跡群は西から大館堤・大館町・大新町・小屋塚・前九年・館坂遺跡が立地し、さらに台地から一段下がった段丘面(上田段丘)にも平安時代から江戸時代までを主体とした稲荷町・里館・権現坂・安倍館・宿田南の各遺跡も存在しています。

これらの遺跡の中でも大館町遺跡は早くから調査・研究がなされており、昭和20年代後半には学会などに発表され、また組織的な発掘調査も岩手大学によって昭和31年から数回にわたって実施されてきました。これらの調査成果は、いずれも縄文時代中期(約4,000～4,500年前)を中心とした大規模な集落跡の存在を裏付けるもので、おびただしい数の住居跡、多量の土器や石器が発見されています。

また一方、東側に隣接している大新町遺跡からは、市内で最古の縄文時代草創期(約10,000年前)の爪形文土器、早期前葉(約8,000年前)の押型文土器・

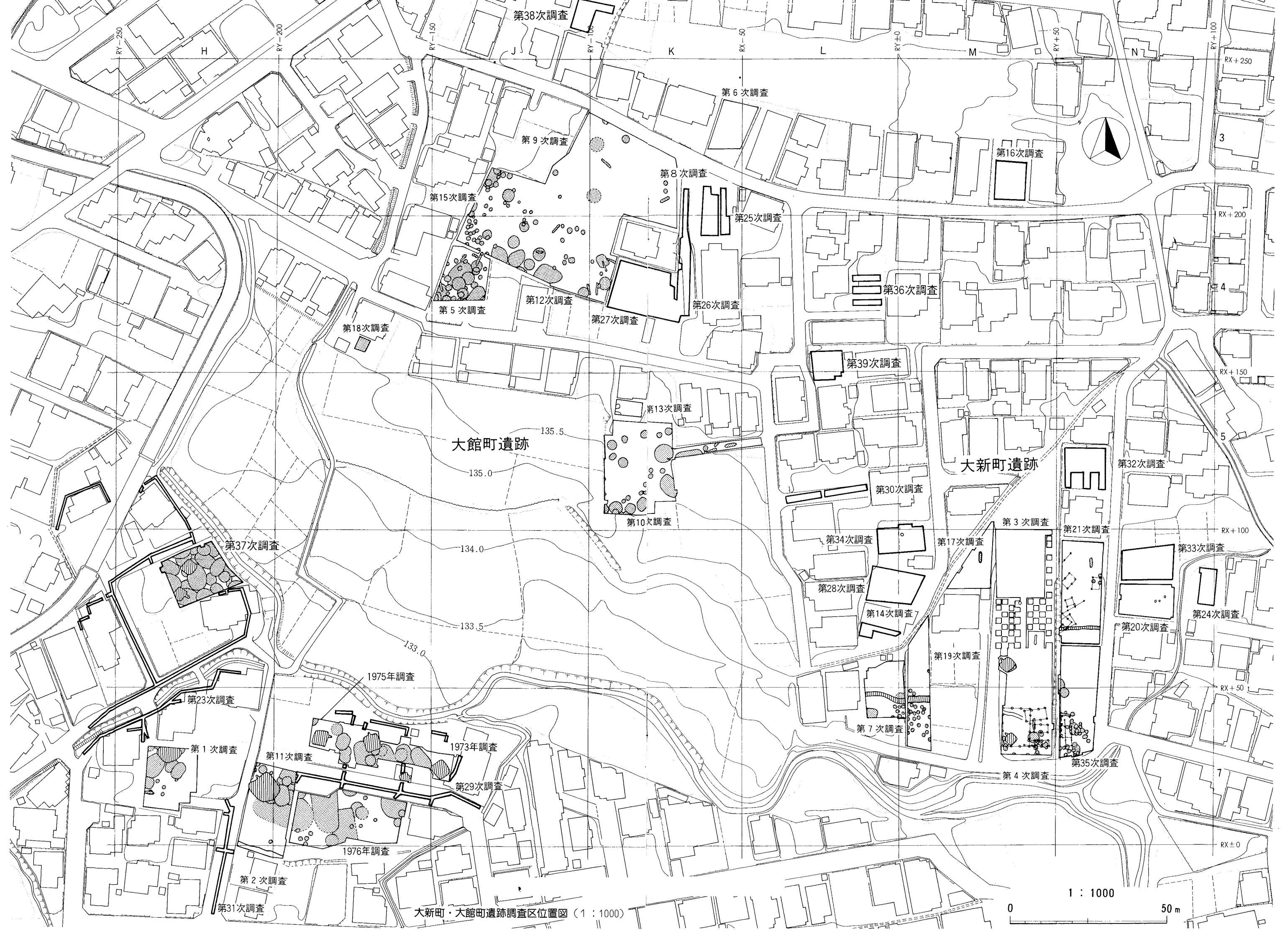
ちんせんもん
 沈線文土器が多量に出土したほか、縄文中期の土塚群(食物貯蔵穴)や平安時代の終わり頃(11世紀)の竪穴・掘立柱建物跡なども検出されています。

小屋塚遺跡からは縄文中期の住居跡のほか、直径2mを越える大きさの円形の貯蔵穴群(フラスコ形土塚)が集中して多数確認されています。

東北本線の東側に広がる前九年遺跡も縄文中期の住居跡が点在して検出されたほか、最近の調査では縄文早期中葉(約7,000年前)の貝殻文・条痕文土器や奈良時代(約1,300年前)の円形周溝(直径4～8mの円形の溝)などが検出されています。

このように大館遺跡群は、縄文時代を中心として発展した遺跡群で、特に各遺跡に共通する中期においては、やはり大館町遺跡が中核的存在で、当時の集落構成の上でも、拠点的な性格をもった遺跡であると考えられます。

大館町遺跡の平成元年度までの調査成果を総合すると検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡130余棟、竪穴10棟、土塚100余基、奈良～平安時代の竪穴住居跡7棟、溝跡1条などで、縄文時代の住居跡のほとんどは中期に所属するものばかりです。



大新町・大館町遺跡調査区位置図 (1 : 1000)

1 : 1000
0 50 m



大館町遺跡第37次調査全景（北東から）

2. 平成2年度の調査

大館遺跡群における平成2年度の調査は4件の個人住宅の新築工事ともなう緊急発掘調査が実施されました。（大館町遺跡第37次調査、大新町遺跡第36・38・39次調査）。そのうち、国庫補助事業として実施されたのは第36・37次調査の2箇所、調査総面積は359㎡、調査経費は800万円です。

■大新町遺跡第36次調査

□所在地－盛岡市大新町16-6

□調査期間－1990年9月10日～9月19日

□調査面積－57㎡

□検出された遺構・遺物

遺構は検出されず、縄文時代早期・中期の土器片数点出土。

□概要

本地点は南北に広がりをもつ大新町遺跡のほぼ中央部の西側にあり、大館町遺跡の北東部に接するところに位置しています。やや東向き、緩い傾斜地に立地していますが、この周辺域の遺構・遺物の密度は低く、両遺跡が分けられる地域と考えられます。

■大館町遺跡第37次調査

□所在地－盛岡市大館町143-9

□調査期間－1990年5月7日～8月31日

□調査面積－302㎡

□検出された遺構・遺物

縄文時代中期－竪穴住居跡41棟、竪穴4棟、掘立柱建物跡2棟、土坑12基

縄文時代早期－住居跡群の下部に遺物包含層が形成。

奈良時代－竪穴住居跡1棟

平安時代－竪穴住居跡1棟など

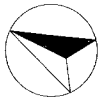
□概要

本地点は東西220m、南北250mの広がりをもつ縄文時代中期の大規模集落跡の南西部に位置しています。

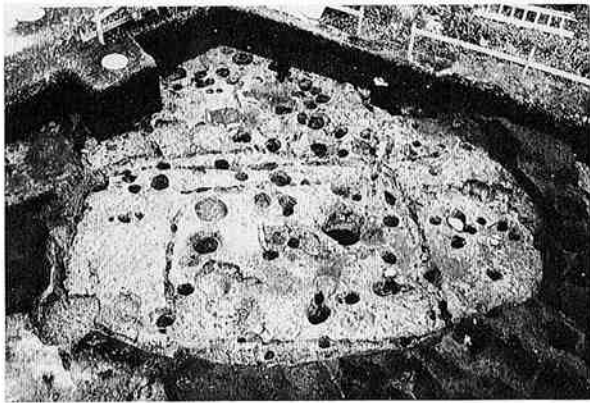
調査区は15×20mの広さでしたが、おびただしい数の竪穴住居跡が重なり合った状態で確認され、長期間にわたって「ムラ」が存在していたものと思われます。

また集落跡の南部の一部には低地が入り込み、集落南半部は全体東西に「東ムラ」と「西ムラ」に二分され、それぞれ同時代に竪穴住居が配置されていたと推定されます。

なお、本書では第37次調査資料を中心として紹介します。



大館町遺跡 第37次調査区全体図 (1 : 100)



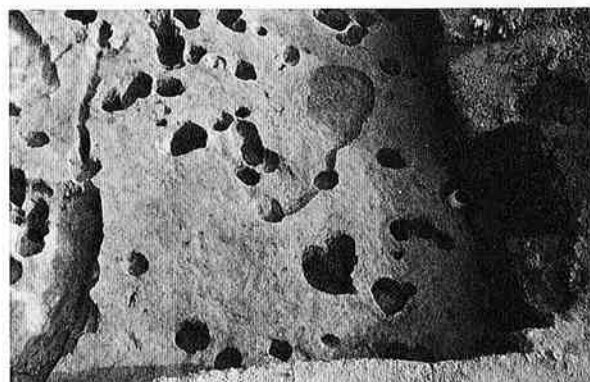
長方形の住居 (RA2164) (大木8a式期)



楕円形の住居 (RA2154) (大木8b式期)



重複した住居 (外RA2149・大木8b式期、内RA2177・大木8a式期)



埋甕出土の住居 (RA2118・大木8b式期)

3. 検出された遺構

住居跡など遺構^{いこう}の検出作業は、地表面にある耕作土の除去作業から始まり、徐々に下層へ下げていきます。

調査区内は作付などによる攪乱がいちじるしく、かつ各時期の遺構が重なり合っているため、検出作業は大変手間取りました。

検出の結果、調査区内全域から密集し重なり合った状態で縄文中期の竪穴住居跡が41棟確認されましたが、壁や周溝が認められ、はっきりと住居の形がわかるのは15棟ぐらいです。

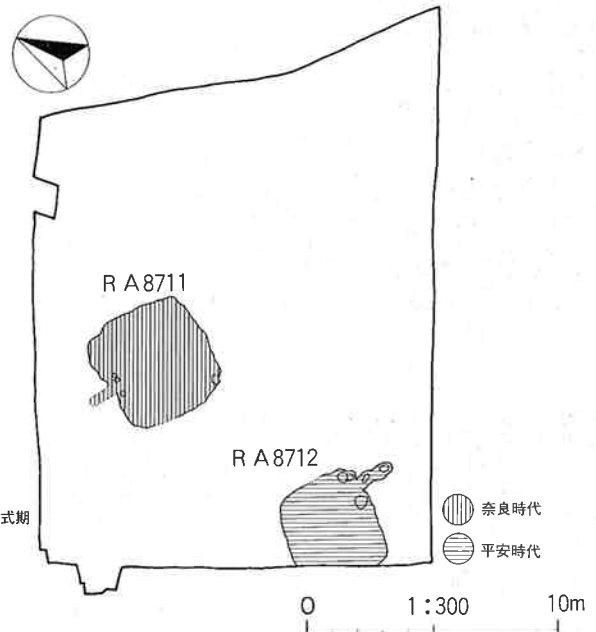
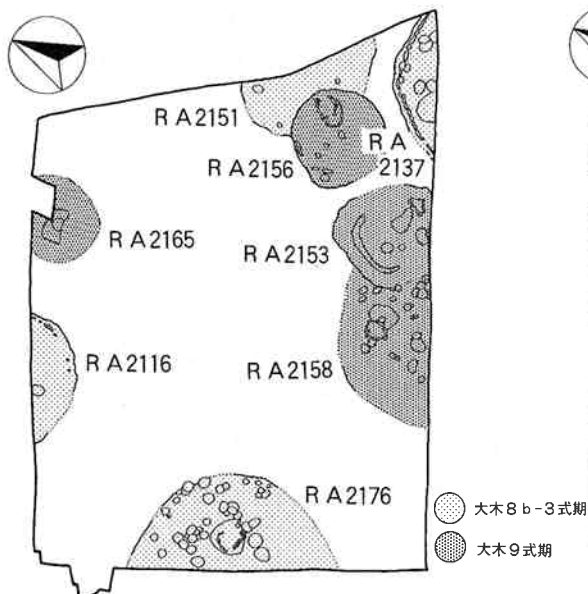
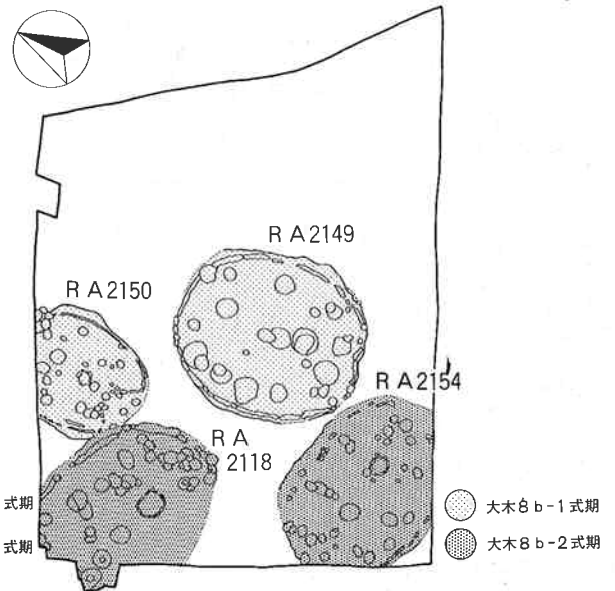
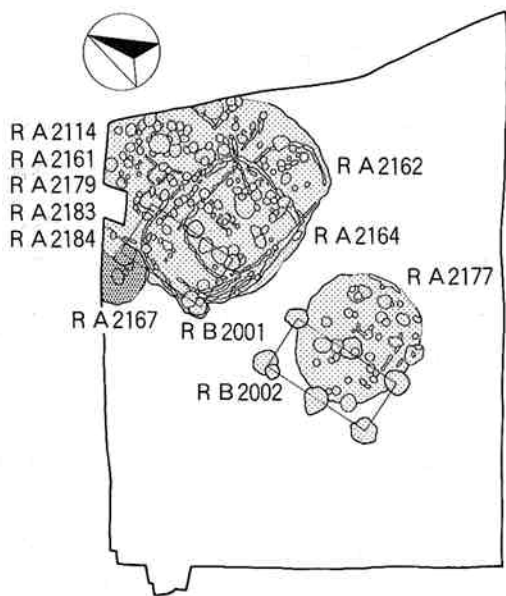
土器型式から住居跡は中期中葉の大木8a式期から中期末葉の大木9式期までのもので占められています。

古い段階の大木8a式期では長方形を基調としたRA2164住居跡や楕円形のRA2177が大木8b式期の床面下から検出されています。次の大木8b式期段階が最も棟数が増え、楕円形を基調とした形で住居の規模もやや大型化しています。RA2149は長軸7.8m、RA2118は8m以上、RA2154も8m以上の住居で、しっかりとした柱の配置が見られ壁にも周溝が巡っています。中期末葉の大木9式期に所属する住居跡で形が確実に判明するものはRA2156住居跡です。直径3.8×3.6mの円形で北東壁寄りに二重に石が巡った複式炉^{ふくしきろ}があります。前段階の住居に比べ規模もやや小さくなり、出土遺物も少なくなります。

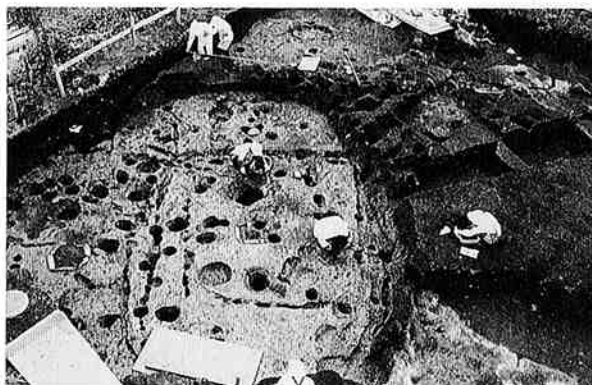
■盛岡周辺で検出される縄文時代中期の竪穴住居跡は出土する土器を型式分類することにより、大木7式から大木10式の4期に大別され、さらに7式は2段階(7a・7b)、8式は5段階(8a-1・8a-2・8b-1・8b-2・8b-3)、9式は2段階(9a・9b)、10式は2段階(10a・10b)に細分されています。



炉が壁際にある住居 (RA2156・大木9a式期)



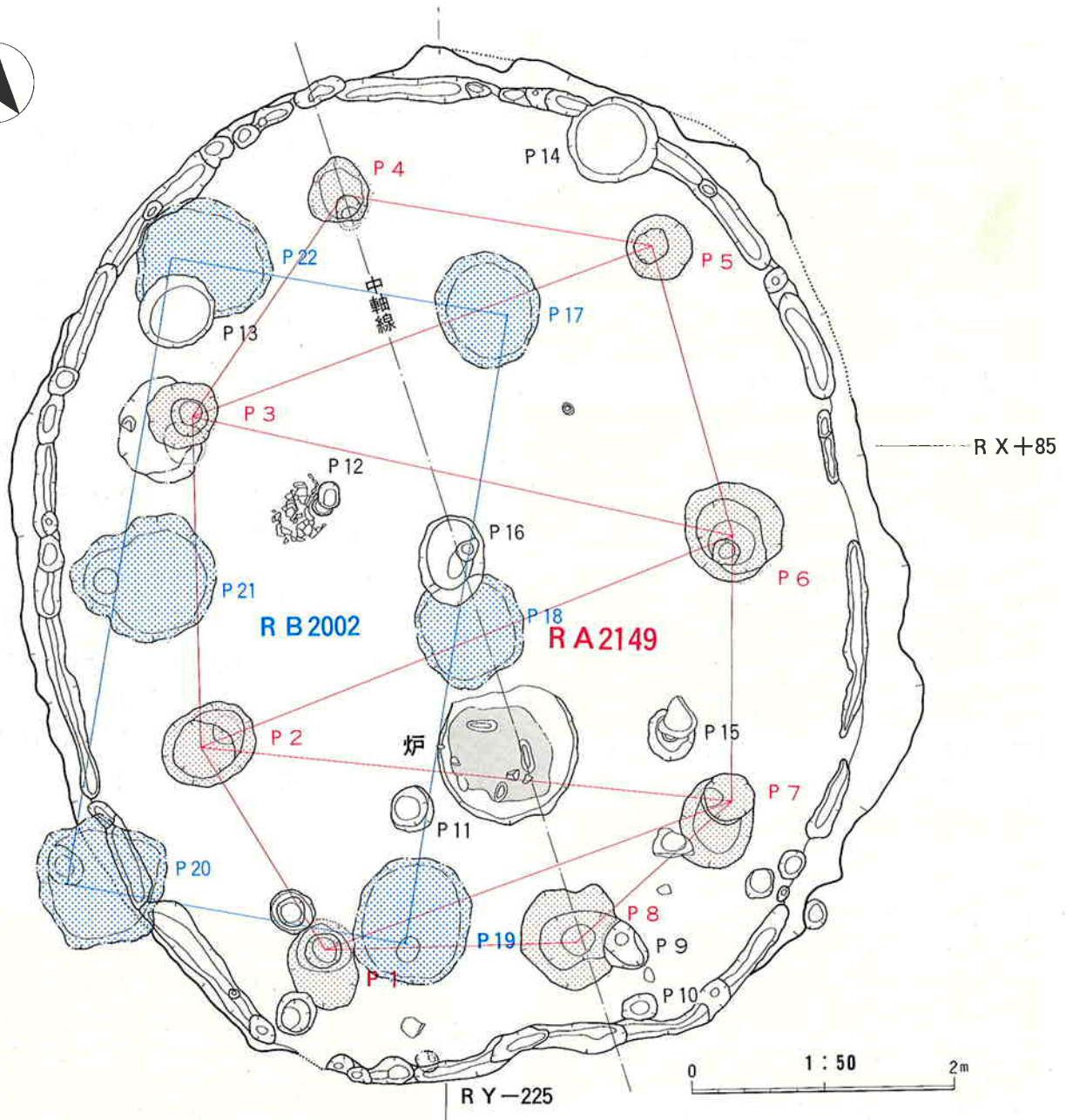
竪穴住居跡群の配置（時期別）



調査風景

4. 重複する住居群

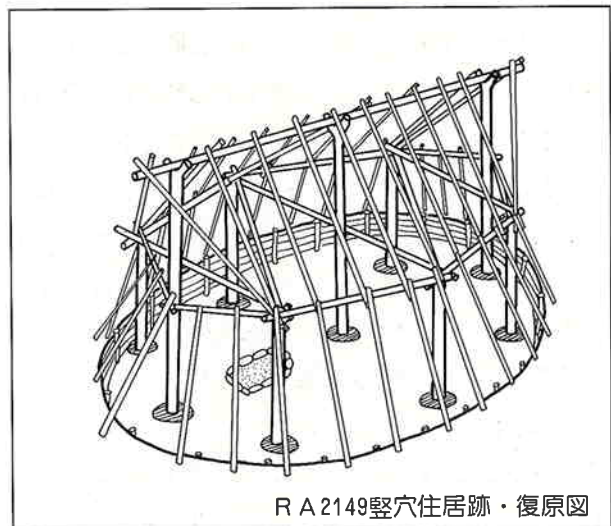
密集して検出された住居跡も、時期別に区分して表現しますと上図のように整理されます。ただし形・時期が不明な住居も多く、図示できたのは41棟中24棟だけです。それぞれの配置図から見ても、まだ隣接かつ重なり合う住居があり、同時に存在していたとは考えられません。爆発的に人口が増加した縄文中期でも、集落全体で同じ時間帯に建てられた家は5～7棟程度と考えられています。



縄文中期の竪穴住居跡と掘立柱建物跡

5. 住居の構造

R A 2149は調査区中央部で検出された竪穴住居跡で大木8b-1式期に所属します。南北方向に長い楕円形で7.8×6.9mの規模をはかります。住居の屋根を支える柱は8本で、八角形に配置され、中軸線上に検出された3本の柱穴むねもちばしらが棟持柱になり、東西2列の6本がそれぞれの桁柱けたばしらになります。桁柱どうしを繋ぐ梁はりは位置関係から見て、ジグザグに配置されたものと考えられます。炉は中軸線上南寄りにあり、本来は石囲炉いしがこいろと思われませんが、石は抜き取られて残っていません。



R A 2149竪穴住居跡・復原図



土器埋設石囲炉 (R A 2164住居跡・大木8 a 式期)



配石土器敷炉 (R A 2177住居跡・大木8 a 式期)



石組複式炉 (R A 2156住居跡・大木9 式期)

7. 掘立柱建物跡

調査区中央部から北西部にかけて2棟の掘立柱建物跡が検出されています。この建物跡は地面を掘りくぼめた竪穴住居とは違い、平地に柱穴だけが掘られたものです。R B 2001・2002ともに南北2間、東西1間で主軸方向はほぼ南北方向と一致しており、規模はR B 2001が桁行4m・梁間2.4m、R B 2002が桁行4.8m梁間2.7mをはかります。柱穴の直径は0.8~1.0m深さは0.2~0.5m程度と浅く、炉は認められません。

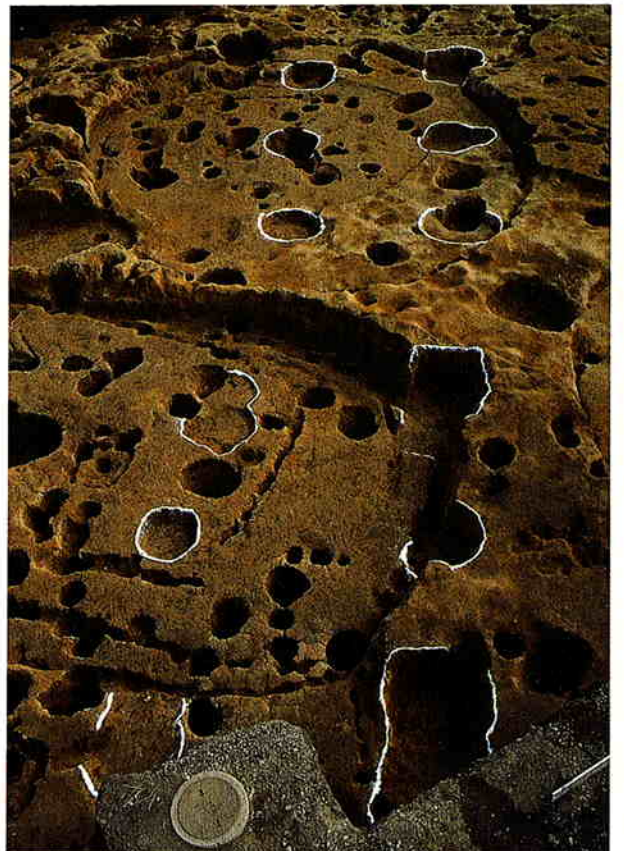
東日本では縄文前期から出現し始め、性格的には祭祀場説もありますが、大館町遺跡の2棟については構造上から、食料貯蔵庫と考えられます。

6. 住居の炉

人類が火を使用し始めたのは約数十万年前の前期旧石器時代と推定されています。火の使用は食物の加工、暖房、照明など日常生活には欠かせないものとして普及し、縄文時代の住居内にも配置されています。ただし大新田遺跡で発見された例などから、縄文早期の住居跡でははっきりした炉跡はまだ作られておらず、前期以降、屋内中央に床面を少し掘りくぼめた程度の「ちしやうろ地床炉」、そして中期中葉頃に石をならべた「いしがいろ石囲炉」が作られるようになりました。

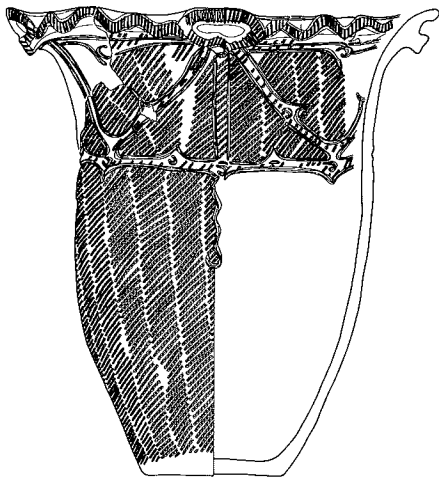
今回調査した大木8 a・8 b 式期の通常規模の住居では石囲炉のものと地床炉のものがあり、さらに炉内に火種を保存する「火つぼ」としての埋設土器などの施設も付属しています。やや大形の住居の炉は円形ないし長方形の石囲炉が主流となり、住居中軸線上やや北寄りに配置されるのが特徴的です。

中期後半の大木9~10 式期では住居の壁際に炉が近づき、かつ炉の機能が分化した「ふくしきろ複式炉」が出現します。



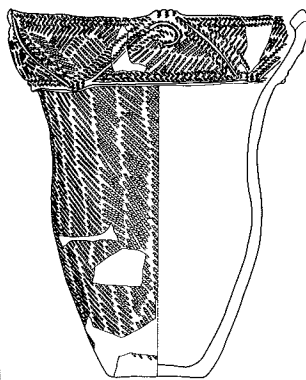
掘立柱建物跡 (手前R B 2001・奥R B 2002, 大木8 a-1 式期)

深鉢

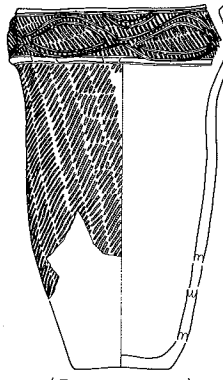


(RA2164・7b)

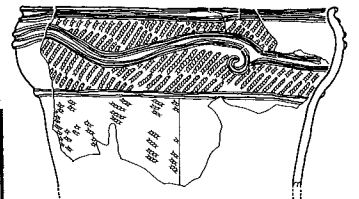
キャリパー形深鉢 (煮炊き用)



(RA2164・8a)

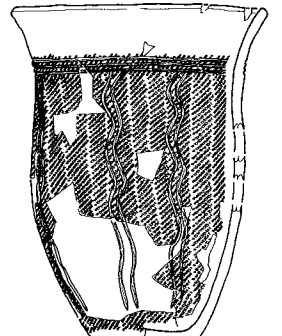


(RA2164・8a)



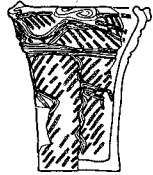
(RA2150-8b)

深鉢 (煮炊き用)

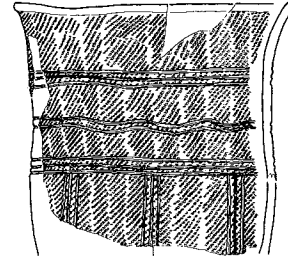


(RA2149・8b)

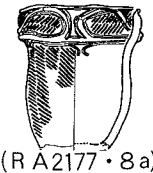
キャリパー形小形深鉢



(RA2164・8a)



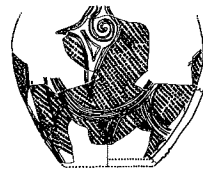
(RA2149・8b)



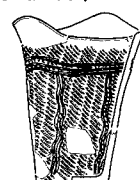
(RA2177・8a)



(RA2150・8b)



(RA2154・8b)



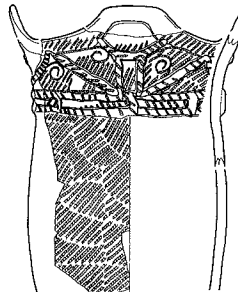
(RA2149・8b)



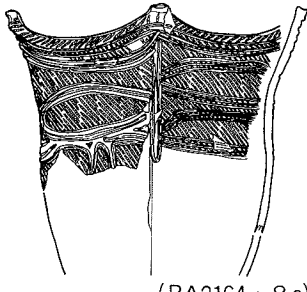
(RA2118・8b)

小形深鉢

(円筒上層式)

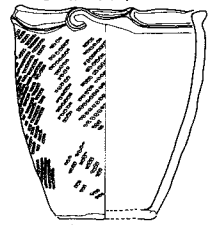


(RA2149・8a)

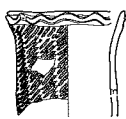


(RA2164・8a)

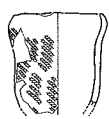
小形深鉢



(RA2164・8a)



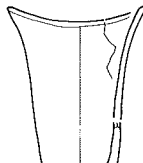
(RA2164・8a)



(RA2177)



(RA2177)



(RA2164)



(RA2164・8b)

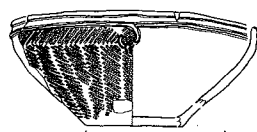


(RA2158・8b)

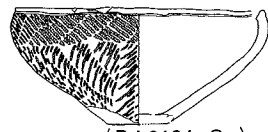


(RA2176・8b)

浅鉢 (盛り付け用)

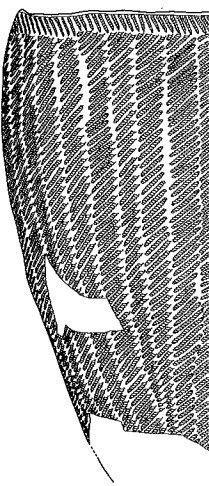


(RA2150・8a)

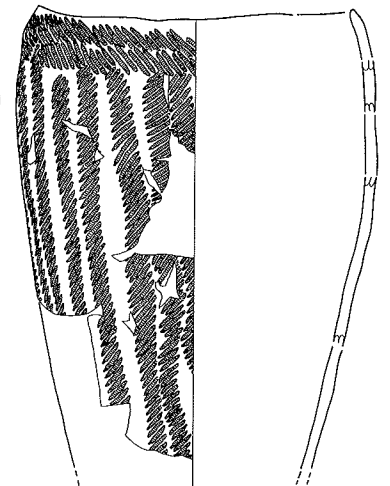


(RA2164・8a)

深鉢 (煮炊き・貯蔵用)

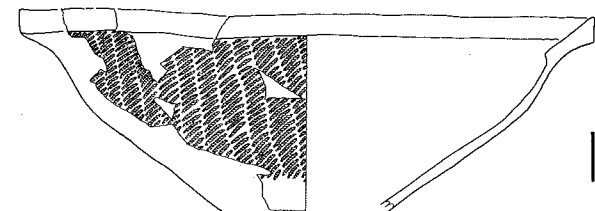


(RA2164)



(RA2150)

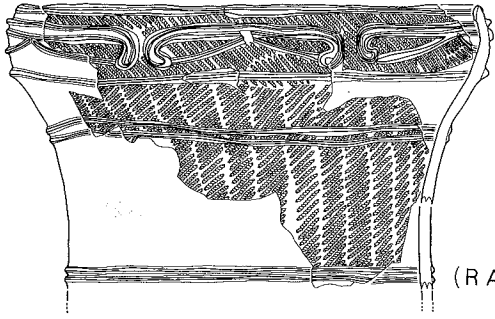
(RA2164・8a)



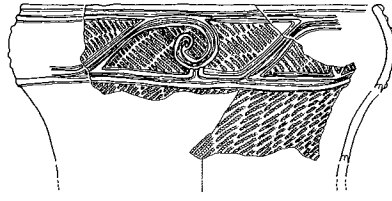
(RA2164)

出土土器(1)

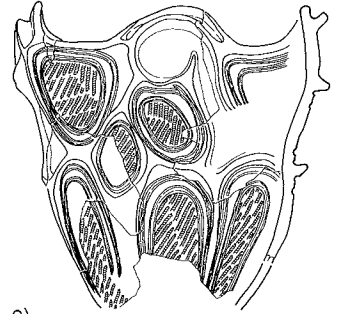
深鉢



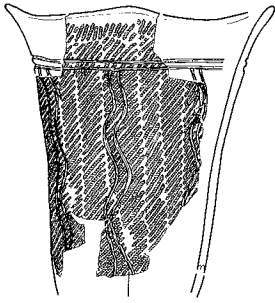
(R A2154・8 b)



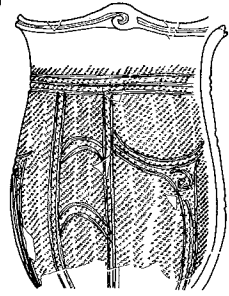
(R A2164・8 b)



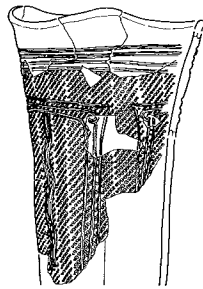
(R A2185・9)



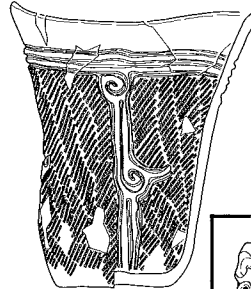
(R A2164・8 b)



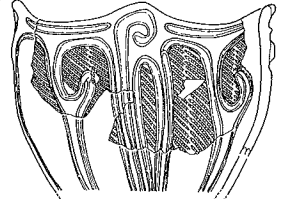
(R A2149・8 b)



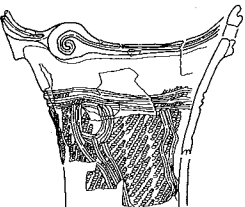
(R A2164・8 b)



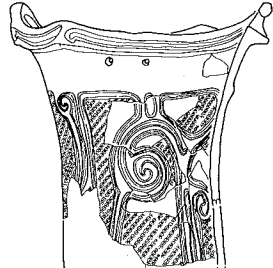
(R A2164・8 b)



(R A2165・9)



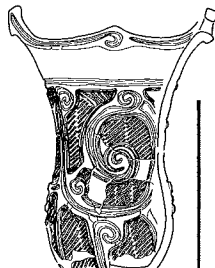
(R A2164・8 b)



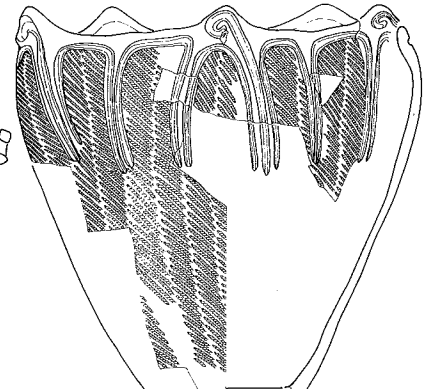
(R A2164・8 b)



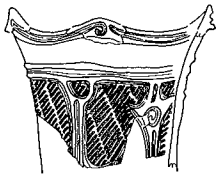
(R A2176・8 b)



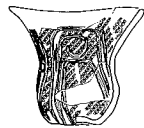
(R A2164・8 b)



(R A2156・9)



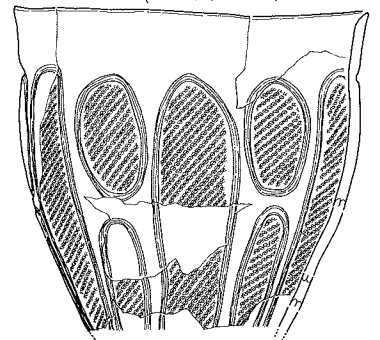
(R A2118・8 b)



(R A2154・8 b)



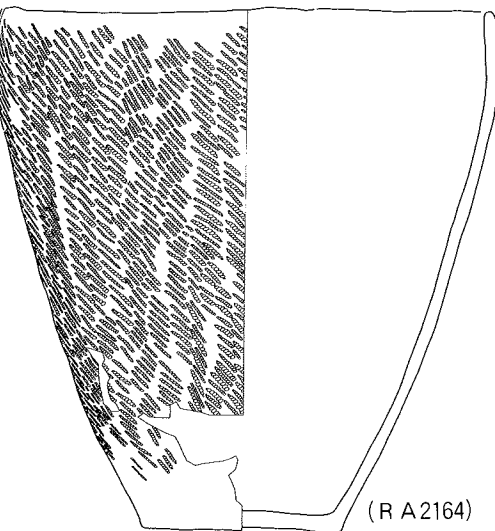
(R A2176・8 b)



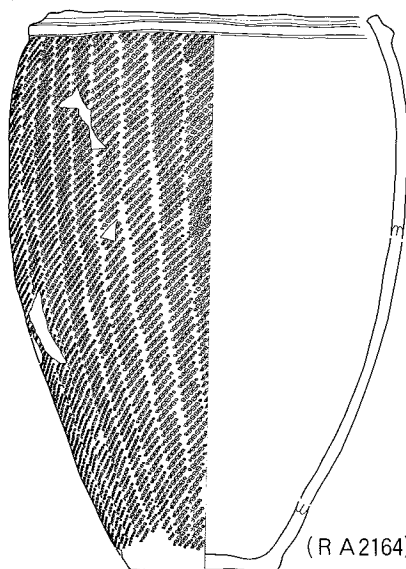
(小形深鉢)



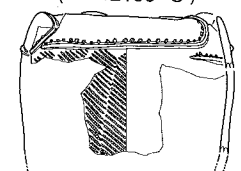
(R A2158・9)



(R A2164)



(R A2164)



(R A2156・10)

0 1 : 6 20cm

出土土器(2)



1



2



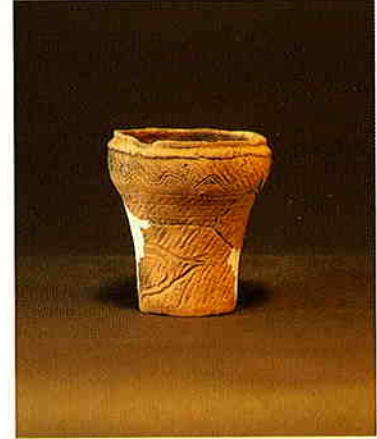
3



4



5



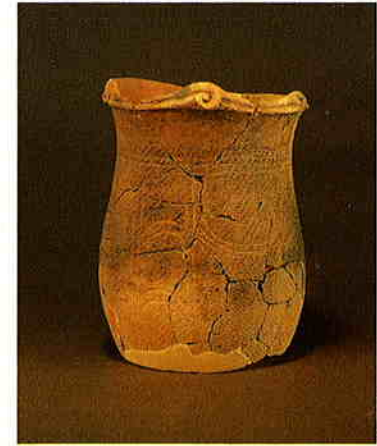
6



7



8



9

8. 中期の土器（ふたつの土器文化）

南北に長い日本列島の中では、地域によってさまざまな土器が作られていました。岩手県内では南部の**大木式土器**と北部の**円筒式土器**に大きく区分されており、前者は宮城県七ヶ浜町大木田貝塚の資料、後者は青森県八戸市是川中居貝塚などの資料を標式として設定されているものです。このふたつの土器文化はおおよそ盛岡を境として接触しています。

9. 土器の形と用途

縄文中期の土器は大きくは**深鉢**と**浅鉢**の組み合わせが基本となります。深鉢は土器の機能の中で最も重要な「**煮炊き**」の道具として使用され、浅鉢は食物の「**盛り付け**」用として定着するようになります。また深鉢には文様の描かれた**精製土器**と縄文だけの**粗製土器**があり、さらに大・中・小の3種類に区分され、大形のものは「**貯蔵用**」、小形のものは各自**銘々器**とも考えられます。



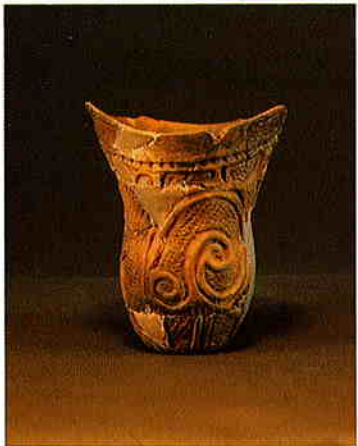
10



11



12



13



14



15

10. いろいろなかたちや文様

中期の土器は縄文時代の中でも雄壮かつ男性的な文様意匠をもつ時期です。しかしそのいろいろなかたちや装飾性に富んだ文様は、中期に突然に発生したのではなく、縄文前期の終わり頃の技術・技法をふまえさらに発達させたものなのです。

大木7b式土器

この時期の土器は文様に縄を器面に押し付けた圧痕文をもつのが特徴となり、大きな山形突起をもつ深鉢が発達します。また平縁で波状の粘土紐を装飾した深鉢もあります(写真1)。文様は口縁部から体部にかけて沈線で描かれています。

大木8a式土器

前段階の流れをくむ大形の山形突起をもつ深鉢と平縁で口縁部が丸くふくらむキャリパー形深鉢が主流を占めます。口縁部には縄の圧痕や沈線で波状文や小さな渦巻文が描かれています。(写真2~6)。また8a式と同時の円筒上層d式土器も出土しています(写真7)。

大木8b式土器

この段階では8a式で出現した渦巻文がよりダイナミックに展開し、最も力強く表現されています。器形ではキャリパー形のほか、口縁部が外反したり内湾するものなど多様化してきます。文様は沈線文のほか、入念に調整された隆線で装飾されています(写真8~13)。

番号	器種	出土遺構	高さ(cm)	口径(cm)	時期
1	深鉢	(RA2164)	37.1	34.2	大木7b
2	キャリパー形深鉢	RA2164	29.1	22.9	大木8a-1
3	キャリパー形深鉢	RA2164	28.6	16.7	大木8a-2
4	キャリパー形小形深鉢	RA2164	13.5	9.2	大木8a-2
5	キャリパー形小形深鉢	(RA2117)	11.5	9.4	大木8a-2
6	キャリパー形小形深鉢	RA2150	8.9	7.2	大木8b-1
7	深鉢	RA2164	18.0(残存部)	23.7	円筒上層d
8	深鉢	RA2149	27.0	19.8	大木8b-1
9	深鉢	RA2149	22.5(残存部)	16.2	大木8b-1
10	キャリパー形深鉢	RA2118埋蔵1(下)	43.0(残存部)	36.0	大木8b-2
11	深鉢	RA2118埋蔵2(下)	48.0(残存部)	40.5	大木8b-2
12	キャリパー形深鉢	RA2118埋蔵1(上)	37.0(残存部)	47.0	大木8b-2
13	小型深鉢	RA2176	13.1	11.1	大木8b-3
14	深鉢	RA2164	44.1	25.3	(大木8a?)
15	舟形土器	RA2118	3.8	12.7×7.8	大木8b-2

11. 埋 甕

縄文時代の埋葬方法には屈葬や伸展葬のほか、土器に遺骸や骨を納めて埋めた埋甕墓（甕棺墓）の例も見られます。特に竪穴住居跡内の床面出入口周辺に、底部を欠いたり孔を穿ったりして埋設されているものについては、乳幼児の遺骸を埋納した甕棺とする説と胎盤を埋納した施設とする考えの二説があります。

前者は乳幼児は普通の墓に葬らないで特に丁寧に扱われ、常にそばに遺骸をおき、母親の胎内に再生することを願う妊娠呪術と関連付け、後者は出入口付近に埋めて「踏めば踏むほどその子がじょうぶに育つ」「賢い子になる」などといった民俗事例からそれぞれ説明しています。

盛岡市内で過去に出土した埋甕および底部穿孔の土器の事例は柿ノ木平遺跡で1個体、繫V遺跡の国指定重要文化財の7個体、大館町遺跡第15次調査での1個体などがあります。いずれも縄文中期の大木8b式期に所属するものです。



埋甕 出土状況

RA 2118住居跡出土の埋甕

今回、発見された埋甕は住居跡の中軸線上に直列に2基配置され、それぞれ二つ重ねの倒立（さかさま）の状態で見出されました。埋甕1は上下ともに頸部がくびれ、口縁部が屈曲する「キャリパー形深鉢」で二者とも体部下半を欠いており、埋甕2は下が底部を欠く大形深鉢、上が口縁部～体部上半を欠く粗製の縄文の深鉢で底部に直径5.5～6.0cmの孔が穿たれています。



埋甕 1



下部



上部



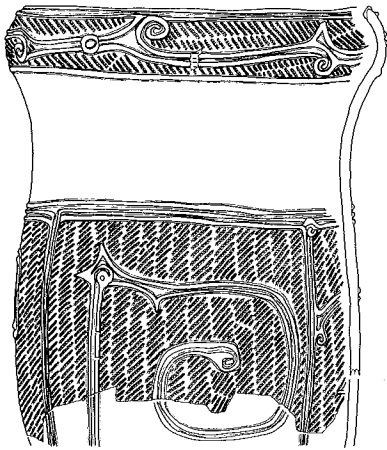
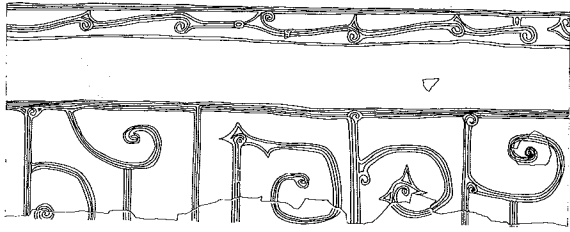
埋甕 2



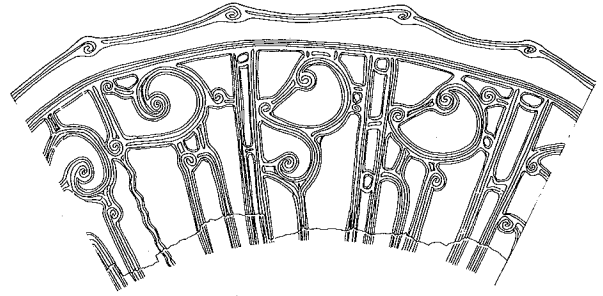
下部



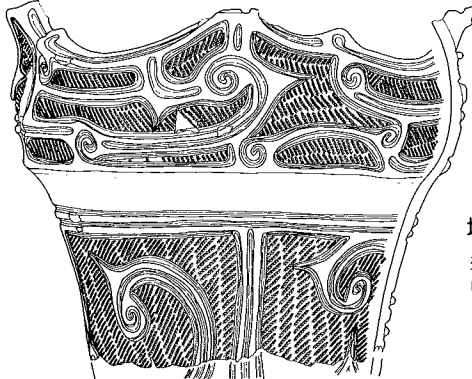
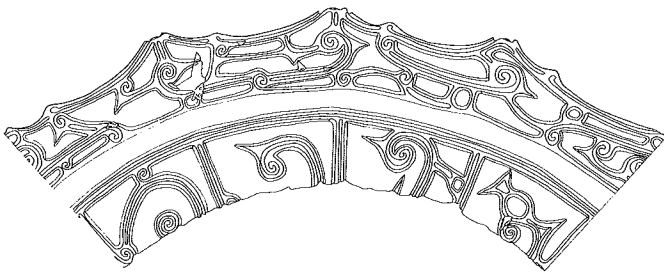
上部



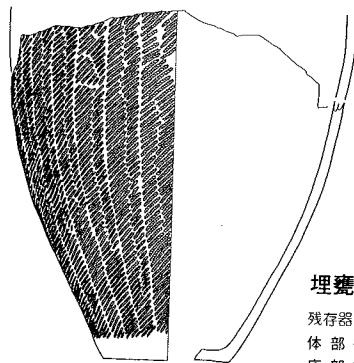
埋甕 1 (下部)
残存器高 43cm
口 径 36cm



埋甕 2 (下部)
残存器高 48cm
口 径 40.5cm



埋甕 1 (上部)
残存器高 37cm
口 径 47cm



埋甕 2 (上部)
残存器高 35cm
体 部 径 33cm
座 部 径 12.5cm



(底部)

0 1 : 6 20cm

11. ま と め

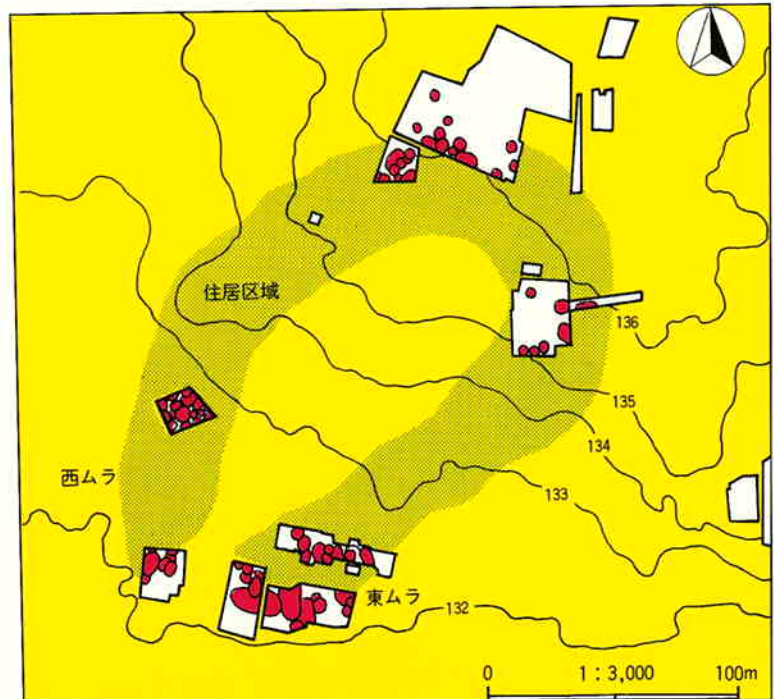
以上が平成2年度大館町遺跡第37次調査の概要ですが、過去の調査成果をふまえてさらに縄文中期の「ムラ」の広がりについてまとめてみたいと思います。

今回までに大館町遺跡では約20地点で調査が実施されており、特に南端部と北～北東部にかけて集中しています。その結果、南端部では第1・2次調査区間が低地になることが確認され、中期の集落跡は「東ムラ」と「西ムラ」に二分されることが判明しています。「東ムラ」では今までに55棟以上の竪穴住居跡が検出され、その分布は南北40m東西55mの規模で、さらに住居区域は北へのびると推定されています。

時期別に見て「東ムラ」の最盛期は大木8a式後半から8b式後半の住居が築かれる頃で、それより古い時代の住居（大木7a・7b式）はことごとく、新しい段階の住居群によって壊されています。しかし、住居区域周辺の傾斜面にはその古い段階の遺物包含層（投棄された遺物の堆積層）があり、近くに生活の場があったことを証明しています。第37次調査区は「西ムラ」の南端部から北へ約60mの位置にあり、その西側は20m程で傾斜地になります。現段階での「西ムラ」の規模は東西40m南北80mで「東ムラ」と同様、さらに北へのびるものと考えられます。「西ムラ」では今までに約80棟の竪穴住居跡が確認され、存在していた時間帯については台地周辺部からやや奥まることから、古い段階の大木7a・7b式は少なくなるも、基本的には「東ムラ」と同時期で、幅20mの低地をはさんでい対峙していた可能性が考えられます。

また、北半部の調査では大木8a式期の遺構群が主体となり、遺構密度も徐々に稀薄になっていきます。

これらを総合すると遺跡全体の範囲は東西220m、南北250mでおおよそ上図のような南西に開口部をもつ楕円形ないし^{ばていけい}馬蹄形の集落配置が考えられ、密度から



ムラの構成（馬蹄形の集落）



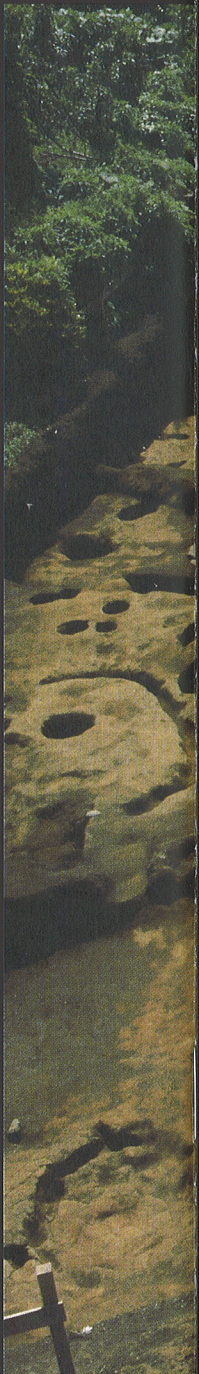
大館町遺跡全景（南東から）

見ても数100年もつづく大集落が営まれていたことが推定されます。

しかし中央部の60×150mの区域については未調査のため、遺構の存在も不明です。最近の東北地方の中期集落の調査事例では住居区域と区画されるように内側に墓域が整然と配置されて発見された遺跡もあることなどから、大館町遺跡の集落の全貌およびその性格を解明するには、さらに今後の発掘調査の成果を待たねばなりません。

第37次調査検出遺構一覧

遺構番号	平面形	規 模 長軸×短軸 m	主 軸 方 向	主 柱 穴 (配 置・本 数)	炉の形態(数)	床の状態 (周溝・貼床等)	時 期	特 記 事 項
RA2114	円形?	(?×約6.3)m	?		石囲埋糞炉 (1)	周溝あり	大木8a	
RA2116	楕円形	(?×5.0)m	?		?	周溝、埋設土器あり	大木8b-3	RA2150を切る
RA2117	〃	(?×4.0)m	?		?		大木8b-3	RA2116を切る
RA2118	〃	(?×7.0)m	E18°S	6角形左右対称8本?	石囲炉 (1)	周溝あり	大木8b-2	埋糞2組(4個体)
RA2137	楕円形?	(?×?)m	?		小石囲炉 (1)	〃	大木8b-3	
RA2149	楕円形	(7.8×6.6)m	N17°W	8角形左右交互8本	石囲炉 (1)	周溝全周	大木8b-1	RB2002を切る
RA2150	楕円形	(5.6×4.7)m	N17°W	6角形左右交互6本	石囲炉 (1)	〃	大木8b-1	
RA2151	円形?	(?×5.2)m	?		?	皿状のくぼみあり	大木8b	RA2161を切る
RA2152	円形?	(?×3.3)m	?		?		大木8b?	RA2151を切る
RA2153	隅丸長方形	(?×4.2)m	E22°S		石囲炉(1)地床炉(1)	周溝あり	大木9以降	RA2158を切る
RA2154	楕円形	(7.9×5.9)m	N10°W	8角形左右交互8本	石囲炉(1)地床炉(1)	周溝3期あり	大木8b-1	RA2171を切る
RA2155	楕円形	(7.0?×5.6?)m	N12°E		石囲炉 (1)	周溝あり	?	RA2154に切られる
RA2156	円形	(3.8×3.6)m	N45°E	なし	石組複式炉? (1)	一部周溝あり	大木9	RA2152を切る
RA2157	円形	(3.5×3.5)m	N29°W		石囲炉 (1)	—	大木8b以降	RA2160を切る
RA2158	円形?	?	?		石囲炉 (1)	—	大木9	RD2140を切る
RA2159	—	—	—		—	—	大木8b-3以降	RA2176を切る
RA2160	—	—	—		石囲炉 (1)	—	大木8b-3以降	RA2114を切る
RA2161	—	—	—		石囲炉 (1)	—	大木8a?	RA2163を切る
RA2162	円形	(3.0×3.0)m	—		地床炉 (1)	—	大木8a	RA2163を切る
RA2163	楕円形?	(約7.0×約4.6)m	N40°E	8角形左右交互	石囲炉 (1)	周溝全周	大木8a?	RA2169を切る
RA2164(A)	隅丸長方形	(4.2×3.7)m	E25°S		?	—	大木8a	RA2162を切る
〃(B)	〃	(5.3×3.7)m	E22°S	5角形 5本	石囲炉 (1)	周溝全周	〃	
〃(C)	〃	(6.2×5.2)m	〃	〃	〃	〃	〃	
RA2165	円形	(3.7×3.1)m	N24°E		地床炉 (1)	〃	大木9	RA2167を切る
RA2166	—	—	—		石、土器片囲炉	—	大木8b以降	RA2164を切る
RA2167	楕円形	(?×2.5)m	N2°W		?	—	大木8a-2	RA2114を切る
RA2168	円形	(2.4×2.3)m	N1°W		石囲炉 (1)	—	大木8b以降	RA2149を切る
RA2169	?	?	?		—	—	?	RD2129を切る
RA2170	円形?	?	?		?	—	?	RA2149に切られる
RA2171	楕円形	(約6.2×約4.5)m	W36°N		石囲炉 (1)	周溝あり	大木8b-1	RA2149を切る
RA2172	—	—	—		石囲炉 (1)	—	大木8b-3以降	RA2118を切る
RA2173	—	—	—		石囲炉 (1)	—	大木8b-3以降	RA2176を切る
RA2174	円形?	(?)	?		?	—	?	RA2182を切る
RA2175	円形	(3.5×3.4)m	E11°N		地床炉 (1)	一部周溝あり	?	RA2174を切る
RA2176	楕円形	(約7.5×約6.7)m	W13°N	左右交互 6本か?	石囲炉 (1)	周溝全周?	大木8b-3	RA2118を切る
RA2177(A)	楕円形?	(?×?)m	?		埋糞炉 (1)	倒立埋設土器あり	大木8a	RA2149に切られる
〃(B)	楕円形	(5.4×4.5)m	E2°N	8角形左右交互8本	石囲土器敷炉 (1)	—	大木8a	
RA2178	—	—	—		—	—	—	
RA2179	円形	(?×5.7)m	W35°N		地床炉 (1)	周溝あり	大木8b	
RA2180	?	?	?		地床炉 (1)	—	?	
RA2181	?	?	?		?	—	?	
RA2182	?	?	??		?	—	?	
RA2183	円形?	(?×7)m	?		?	周溝あり	?	
RA2184	?	?	?		?	〃	?	
RB2001	—	(4×2.4)m	N12°E	2間×1間	—	—	大木8a	柱の建替あり
RB2002	—	(4.8×2.7)m	N9.5°E	2間×1間	—	—	大木8a	
RE2001	?	(?×1.6)m	?		—	—	?	RA2149を切る
RE2002	円形?	(?×2.6)m	?		—	—	大木9以降	RA2158を切る
RE2003	楕円形?	(2.0×1.8)m	E21°N		—	—	大木8a?	RA2149に切られる
RE2004	楕円形?	(?×1.7)m	N3°W		—	—	?	RA2137に切られる
RD2128	楕円形	(3.3×1.1)m	N12°E		—	—	早期	条痕文土器
RD2129	円形	(?×1.0)m	—		—	—	大木8b?	
RD2130	円形	(1.4×1.4)m	—		—	—	?	RA2157を切る
RD2131	円形	(0.9×?)m	—		—	—	大木8b?	RA2172に切られる
RD2132	円形?	—	—		—	—	—	
RD2133	楕円形	(1.2×0.9)m	N10°W		?	—	?	RA2158に切られる
RD2134	楕円形	(0.9×0.8)m	N39°E		?	—	?	
RD2135	楕円形	(1.0×0.8)m	E27°N		?	—	?	RA2164に切られる
RD2136	楕円形?	(?×0.9)m	—		?	—	大木8b?	RA2149を切る
RD2137	円形?	?	—		—	—	大木8a~8b	RA2149に切られる
RD2138	円形?	(0.8×0.8)m	—		?	—	大木8a~8b	RA2149に切られる
RD2139	円形	(0.8×0.8)m	—		?	—	—	
RA8711	隅丸方形	(4.2×4.2)m	W34°N		北壁石組カマド	貼床	奈良時代(8世紀)	
RA8712	隅丸長方形	(4.1×3.6)m	W32°N		南壁石組カマド	—	平安時代(10世紀)	
RD8708	隅丸長方形	(12×0.9)m	W14°N		—	—	平安時代以降	



大館遺跡群

平成2年度 発掘調査概要

発行年月日 1991. 3. 30
発行 盛岡市教育委員会
〒020
岩手県盛岡市内丸
12-2
☎(0196)51-4111
印刷 株式会社熊谷印刷